

巴金の作品世界 『秋』 について

中 村 俊 也

序

中国の高名な作家巴金（1904～ ）の長編『秋』は「激流三部作」、『家』（1931年4月）、『春』（1938年2月）、『秋』（1940年5月）として、その間に十年を隔てて完成した大作である。国際事情を例にして整理すれば、「9・18」（いわゆる「満州事変」）の年に『家』が発表され、国共合作の翌年に『春』が、そして、日本が汪精衛首班の南京国民政府を設立した年に発表されたのが、『秋』ということになる。そして、さらに世界大恐慌の3年目、ドイツのオーストリア併合の年、ドイツ軍の北欧占領、フランスの対独降伏の年にそれぞれが世に出た年次とが一致する。こうした状況を勘案して、巴金の世界文学の大作『秋』を見ると、そこにはどのような特徴がうかがわれようか。

巴金はこの長編を、大団円、決着そして希望、出発という形で締括る心算はなかった。それが、なぜ変化したか。題材、背景となっている軍閥の時代よりも、著者の当面の課題、抗日戦の下で中国の人々、とりわけ青年、子女が未来をどう切り拓いていくのか、という目標が喫緊となっていたからである。

「私の憂悶と苦痛の中でさえ、友情こそがこの小説の陰鬱の色調を洗い去ってくれた。それらの友人の面影がそれとなく明るい笑いを聞かせてくれた。（中略）この人達がいなかったら、私の『秋』は決してこのような結末とならなかったはずであり、覚新も生かし続けることはなかったはずで、覚民と琴を婚約させ結婚させることもなかったはずである（私はもともと『秋』に絶望的結果を予定した、覚新の自殺と覚民の逮捕で幕を下ろしたかった）。（中略）」

二年前に述べたように、私は憂慮しつつある。しかも、私のごく小さい心につながるのは、無数の純粋な青年の魂である、私はこの人達に期待する。しっかりと作中人物、琴（チン）のことばを覚えていて欲しい。

「ずっと続く秋なんてありませんもの。秋が過ぎれば、春はすぐ来るんです。」

いま、私はもう春の始まりの息吹を嗅いでいる。」（『序』5頁3～18行）1938年、広州（グワンジョウ）で巴金は日本軍の空襲に遭う。

「二年前、広州の爆撃のさなか、私は数人の友人と四階建の洋館のベランダに蹲まって、爆弾の炸裂音を、機銃掃射を、そして急降下音を聞いた、私は死を待つ中であつたが、終

わっていない仕事のことを考え残念に思った。『秋』の執筆はその中の一つであった。」
 (「序」3頁1～4行)

【秋】執筆の心境は平坦ではなく、苦作であり、動揺を制しつつ平衡は保たれる。

「この数ヵ月は、私の心境は最悪の時期だった。『秋』の執筆は愉快なものではなかった。私はある友人に次のような手紙を書いた。－“私は昨晚『秋』を書きつつ哭いた。…この本は私をひどく苦しめた、このために少なくとも一年半寿命が縮まるのではないか。”つまり、私は“人の心を発掘し”(この言葉を用いるのを許していただきたい)ていた。死人を蘇えらせたり、そのうえ生きている人を墓の中に送ったりもした。私は自分を別の世界の中で生かしつつ、そのなかの男女がどのように喜び悲しむかを観察せしめた。私はナイフで自分の心を切り割いているわけだ。私の夜の時間、それはこのように恐ろしいものだった。毎夜机にかじりついて三時、四時まで書き続けた。そのうち極度に興奮した目つきや心境を帯びてベッドに入るのだった。それは、ハインリッヒ・ハイネの“渴望と切望”が私を背んだというようなものだった。」(「序」3頁1行～4頁5行)

尋常ならぬ苦作は、単なる個人的境遇に発したのではなく、強力な大日本帝国に併呑されるのではないかと、という中国人の大きな危惧に由来した。しかし、『秋』には深遠の世界が存在する。それはどのように読み進めたら幾分なりとも見えるものなのか。

【秋】を通読してまとめようとするとき、そこに、「静」と「動」の際立った対比が目立つ。「静」は中国の旧社会を反映したような大家族、そして、庭園、散策する人々の語り、放歌、高吟、さらには婚儀、節句の祝い、厳肅な葬儀等である。「動」は実権派、祖父、叔父達旧世代グループと、理想派、行動派の青年、子女の新世代グループとの対立。そして両者の調停者にあたるとい、自らの心理的葛藤を抱えた主人公の動揺。このような「内」の状況に変化を与えるのが、「外」の軍閥下中国の政治変動、経済失調、自然災害、そして、「内」と「外」の行動、交流の導管となるのが、「相互扶助」の思想、ナロードニキの思想である。以上の鳥瞰に立ち、【秋】を読んでゆくこととする。

I 庭園、湖水

【秋】の作品に示されるのは、高家所有の邸の広さである。それは実測として正確には言われず、そこを行き来し安住する人々の背景となることで存在を際立たせる。

たとえば、代表的登場人物の一人、高家のモダンガール志向の淑華(シュウホワ)と纏足をしている旧套を維持し忍耐を余儀なくされている淑貞(シュウヂェン)の間の明暗の心境の交流はこの庭の中で進行する。

「【四妹(スーメイ) [=兄弟、従兄弟、姉妹、従姉妹を年齢順に呼ぶ言い方]、私達もうこんなこと話すの辮めよう、歩きましょう。」淑華は淑貞の自身の不運を嘆く繰り言を打ち切って貰うようにする。【ねえ、蟬がよく鳴いているでしょう、これ以上すっきりし

ないことに拘わって話していても何にもならないわ。私達、水閣亭（シュウエイゴオーテン） [= 湖水に臨む建物、客の嬰応、人々の遊戯に使用] のところに行って荷花（ホーホワ） [= 蓮の花] を見ましょう。」

淑華の言うとおりに、窓外の高い樹の梢で知了（ヂーリャオ） [= 蝉] が歌うように鳴いている。それはゆったりとした内に発せられる声である。それは揚がったり途絶えたりして、まるで声音の長短がメロディーやリズムに合っているようだ。このような歌声は緊張している心をゆったりさせ、疲れた体をのびのびさせる。それは徐々にではあるが、彼女達の周囲にのどかな気分を作り上げた。

淑貞はそれ以上自分の苦悩について淑華に訴えようとしなくなる、彼女は淑華に花園の中を速回りしてもらった。綺霞（チシシア） [= 婢女、身の回りの世話係] が付き添っている。

庭園の中は全く別世界だ、空気がやや澄み切って涼しいだけでなく、花や草、樹木は一層旺んに伸びてゆく姿をしている。ここには憎らしい顔もなく、乱暴な声もしない、争いもなければ苦痛もない、名も知らぬ小鳥が枝で思っきり囀っている、あるいは羽をバタバタさせ樹木の茂みのなかを飛んでいった、どれも自由自在でこの世のものと思えぬ気分を残して。彼女たちは芝生に近寄った、牽牛藤（チェンニュウトン）が築山いっぱい覆って咲いている、脇には二本、高い松の樹があり、この樹身にも牽牛藤がまとわりついて、それはやわらかく虫のように上の方に爬っていつている。もう少し先に行って、二つの築山のところで方向を転ずると、一面緑の毛織物のような草地となっていて、たくさんの赤とんぼががつがいになったりしてその上を飛び交っている。

『三姐（サンジェイ）[淑華を指す]、このへんでちょっと休みましょう。』淑貞は訴えるように行った、足がだるく痛むのである。 [= 淑貞の足は纏足で小さく不自由である]]
(二十九章388頁2行～389頁17行)

一度失われたら復元が容易でない、人々の安らぎの中心、巨大ビオトープがそこに繰り展げられている。巴金の庭園のモデルはむしろ、成都の自身の旧居であろう。(1)しかし、この場所がどこと特定することは必ずしも必要ではあるまい。その広がりや人々の拠り所として、しかし、大地主の生活の城砦として封建中国の有様を今日に残すと同時に、今日の人々に不思議な安堵を与える。

この屋敷に存する湖水は、三部作の一部、『家』に描かれている、高家の三男を恋いしながら積極的に守られることもなく、「当世の大儒」の下にかしずかされる運命に違わず身を投じた悲運の女性、「鳴鳳（ミンフオン）」の悲劇に関わる場所である。そのような因縁を有するからこそ、そしてまた二部『春』で高家の二女、「叔英（シュウイン）」が希望の出立をする起点であるからこそ、それは大いなる奥行きを有する。そこを自在に漕ぐ人に注目するとき、湖の明暗が見えてくる。

『秋』の登場人物の中、一つ注目すべきは大家族のハイアラーキーを徹底して持ちこたえ

しめんとする人々である。庭園の静けさも、粘り強い純朴さを強固に有する人々に見守られ、主人公の心の平衡も保たれている。

たとえば、大家族解体ののちに覚新（ジュエシン）に仕え世話をすることになる翠環（ツウエイホワン）は、暗喩の技法を用いて強い芳香を放つ梔子（くちなし）に喩えられている。彼女は高家所有の大庭園の湖水で巧みに小舟を操る娘であり、極めて無口だが実行力に富む。主人公がまさかの時に一層頼りになる人材である。細かい気遣いは全篇を通じて特に目立っている。翠環の身分は、「三房の婢女」 [= 高家の主要家屋の三番目に仕える小間使の女性] である。舟遊びの人々を乗せて櫓を漕ぐ大切な役割が与えられている。

「二双の舟が前後して円拱橋（ユアンゴンチャオ） [= 丸く半月形の弓のように曲がった橋] の下を漕いでゆく。後ろの舟（覚新が漕いでいる）は、間もなく前の舟に追いつく、そのあと二双の舟は並んでゆっくりと進む。覚新の舟には他に〈弟〉の覚民（ジュエミン）、〈従弟の〉枚少爺（メイシャオイエ）がおり〈小間使の〉綺霞 [チイシア] は艀に乗っている。もう一双には〈亡妻の妹〉芸（ウイン）、〈従妹〉琴（チイン）、淑貞、淑華、そして翠環が乗っている。翠環は後ろで櫓を漕いでいる。」（四章48頁13行～16行）

二双の舟は世の大海へと漕ぎ出し、常に荒波に曝される高家ととれぬこともない。だが、平静も高家にむろん存し、それは花園という喩えで、長期の盛時を有した中国旧時の影を曳いている。

「船篷（チュアンボン）（舟を覆う屋根）は頭上の陽光を遮りはする。しかし決して乗っている大勢の人の眼を遮らない。行く手は光明であり、自由の空気であり、豊かな生命に溢れた草木である。耳に心地良い鳥の声、水の音、風の響き、樹木のさやぎである。」（四章48頁8行～11行）

遊芸後の人を大切に無事居所に帰すため、湖水に舟を出して送るのも翠環の役目である。巴金はまめまめしい彼女の働きに月光を配する。さりげない細心さが目立っている。

「覚新と枚少爺が舟を下りた、翠環は舟を漕ぎ皆を送って行く。月がもう高い空に昇っていた。水は鏡のようでその上に樹々の影、山の姿、月の光が映っている。綺霞がもう一双の舟を漕いで、周氏と張氏を送って行く。薄暗い黄色い灯は、まだ前方に揺らいでいる、しかし、それは素早く樹木の茂みに消える。月洞門（ユエドンメン） [= 細長い洞穴のような石の門] の中からひとしきり笑い声が漂ってくる。淑華の若いあくまでも愉快的な声が覚新の疲れた心を慰めている。笑い声はゆっくりと静まってゆき、耳元に規則正しい櫓を漕ぐ音と囁きに似た水の音がする。皆の舟は黒い影の有る場所に今、向かって流れてゆく。」（六章82頁10行～17頁）

以上は庭園の醸し出す諧調の姿である。しかし、『秋』の世界は混乱を描いているといつてよい。それは日本の論客が道破したごとく、まさしく、「美は諧調にはあらず、乱調にあり。(2)」なのである。

巴金は懇切な作家である。全篇の中にヒントを散在させる。読者はここを糸口とし、徐々に

その深遠を覗くことも可能である。否、巴金のみならず、中国の大作は周到な手がかりを惜しみなく示してくれる。それは、単なる親切とは言い得ない何らかの強調、訴えなのである。

巴金の作品に漂う静けさは、一方、変動の中に常に平衡を求める粘り強い生活の営み、智恵の表出と考えられる。失調を来たした人々のざわめきの中に存するユーモラスなあがき、生動ゆえの遊び、余裕が示される。

Ⅱ 粹狂

『秋』の登場人物中、最も目立つ人物は、高家の表立った当事者、克安（コーアン）、克明（コーミン）、克定（コーディン）たちで、彼らは覚新（ジュエシン）の叔父である。彼等は現実の生活の中でかなりある種の自信を持っている。旧套を運営する彼らには、相応に中国専制王朝を二千年以上にわたって持ちこたえた礼教が有る。それは長らく人々の生活に浸透して頑強に根を張っている。三人の叔父たちの一挙一動はこうした枠組みの下に作動し、自己の行動に対する下位の者たちの容喙を許さない。しかし、集団の保障者としての指導性、責任（レスポンスビリティ）を失う時、失調が露呈する。享楽に、病気に、論争に彼らは敗残し、高家の人々は次第に肌膚を寒風に晒すようになる。

では三人が生ずる奇矯（エキセントリック）な行動の原因はどこに求められよう。それは彼らの父、祖父が世の荆棘を拓き、荒波に向かって資産を求めた清末、ひいては中華民国初期の政治・経済の造す強烈な刺激に他あるまい。これらに急速な対応を強いられ、相応の神経で持ちこたえる彼らにも焦慮が生じ、放蕩、デカダンスへと駆り立てられる。享楽は時の経過を忘れさせ、世相の束の間の「安定」を錯覚させる。ここにはその一端を示すこととする。

克安が京劇の役者を相手に興ずる姿はショッピングに表れる。ニューモードの衣装店で物色する二人は、居合わせた覚新の心配などどこ吹く風である。この安閑さには何かユーモアの一種を示す巴金独特の凝った描写となっている。

「覚新は多くの人の眼が彼らの顔に注がれるのが気がかりだった。みんなは張碧秀（ジャン・ビーシユウ）[京劇役者]を見ている（つまり、今まで京劇など見たことのない者は、この間お白粉を擦り込んだ顔、服装と歩く姿を眼にして、これが役者かと改めて知ったのである）。覚新はあまり面白くなかった、しかし、克安と張碧秀を置き放しにするわけにもいかず、一人でそこから逃げるわけにもゆかない。彼はただ耐えるしかなかった。克安が張碧秀ばかりに話しかけるのを見て、足取りを早め、やや少し前を歩く。

（中略）

克安と張碧秀の兩人とも覚新がどんなにやきもきしているかも知らず、彼が常にハンカチで額の大粒の汗をぬぐっているのも気にしない。入念に品物を選び、いろいろな売り物を見ては、これはいいだの、悪いだのと品評に余念がない。店員たちは、克安が大きな顧客であると心得ており、また張碧秀の名前も知っている、そのうえ覚新の機嫌にも気を遣

う、だから大変に辛抱強く彼らの機嫌取りをしてゆく。二人はいよいよ積極的に品選びにこだわり、ますます余計に買う。店員たちは慌ただしくしながら、笑顔を絶やさず。まもなく入り口には七、八人の人々が集まる、張碧秀を見物に来ているようだ。」(二十三章 311頁1行～18行)

ユーモアによって示されるものは時間の経過を忘れて打ち興じる人の姿である。克安の趣味、性癖も「堂に入ったもの」である。

「水閣亭 [シュエイゴータイン] 前の軒下には、オウムの止まり木が掛かっている。赤いクチバシ、緑の羽毛のオウムが得意げに二人 [= 克安と張碧秀] に話しかける、そして首を傾げて不思議そうに見ている。

「このオウムとても面白い、どこから買ったの」張碧秀はオウムを眺めながら面白がって尋ねる。手を伸ばして止まり木の上のオウムをからかう。

「友人がくれたんだ。」克安は得意げである。

「あなた前に教えてくださらなかった。」張碧秀は一言付け加える。

克安はそれには答えない。すると、止まり木の上であちこち動いていたオウムが突如金切り声を出し、足の爪を立て、羽を展げ、張碧秀に向かって襲いかかる。張碧秀は防ぎようもなく、オウムに蹴られ、慌てて克安の懐に逃れる。克安は笑いつつも彼を扶け、癒しながら言う。

「大丈夫だ。人は咬まないよ。鎖で脚を縛ってあるんだから。」

張碧秀は説明を聞いて機嫌をよくし、もう一言。「まだすっかりしない。」と克安から離れる。するとオウムは止まり木の上に戻る。そこで行ったり来たりしている。

「こいつ、私をちょっと威したのね。」克安の方を向いてにこりとする張碧秀。

オウムは止まり木を一通り歩くと、急に動作を緩め、張碧秀に向かって一言、

「翠環 (ツウエイホワン) [使用人の名] お茶を出せ、琴小姐 (チンシャオジエ) (克安の従姉妹) が来たぞ。」

「ほら、こいつ、お前を女っ子とってる。人の区別が分からないんだ。」

克安はオウムについて張碧秀に言う。

「お前はやはりろくな者じゃないな。」

オウムが克安に向かい急に口を開けて話しをする。

張碧秀は歯切れよくハッハッハと笑い出す、身をのけぞらして克安に言う。

「聞こえた、あいつあなたの悪口言ってる。」「このろくでなしが、いつの間にか悪口を覚えとって、きっとあのいたずらっ子 [従弟の年少の者たち] らが教えたんだろう、あとで懲らしめてやる。」克安は笑い半分、怒り半分。」(18章240頁26行～241頁23行)

こうして克安はお気に入りの役者にあっさり友人からの贈物のオウムを与えてしまう。やがて下心を覗かせてからかわれることになる。

「あなた、本当に私にくれるの。」張碧秀は喜んで確かめる。

『どうして本当でないことがあるもんか。』面倒臭そうな克安。

『そう、本当、うれしい。何かお礼しなきゃ。』張碧秀はにっこり、ありがとう、と言う、しなを作り克安の機嫌をとる。克安はひどく喜ぶ、だが物足りない様子、いいや、のしるし。

『そんな礼じゃ足りんぞ。』

『じゃあ、どんなふうにお礼したら喜んでくださるかしらね。』

克安は口を張碧秀の耳の辺りに近づけ二言、三言。

『ひゃあ』張碧秀は軽くあしらい、真っ白い歯を見せる。

『お前、本気じゃないのか。』克安はしてやったりとばかり追い打ちをかけるように問う。彼の目はずっと細まってゆく。

(中 略)

張碧秀は羞かしがり、お白粉の顔を真っ赤にしてまるでオウムのよう。(十八章240頁7行～17行)

本当に旧社会にタイムスリップしたようだ。克安の世慣れた海千山千の姿がここには遺憾なく示される。経済活動に深く切り込んでいる当事者の憂さ晴らしは尋常一様ではない。寛新と比べた場合、彼においてはこうした行為は見聞の範囲にあらうが、しかし、そこへ身を以てする行為には到らない。克安の場合、外部から観ると時間が止まって見える。巴金は、高家の大いさを克安の行為によって描き出す。

粹狂は、遂には高家の当権者の心身を腐敗してゆく。封建社会の享楽。やがて人を失力し、変動に対して敏捷に対応し得ず右往左往を繰り返す状況に到らしめる。

新しいシステムに伴なう災厄の場合には、日頃忍耐強く下支えをし力を保持してきた人々が活躍し、その存在が目立ってくる。著者は各所にこのような場面を打ち出す。しかし、システムの交替には激烈な論争、闘争、ヴァイオレンスが必ず生じてくるのも事実である。高家の変動はどう齎れるのか。

Ⅲ 相互扶助

大家族の集団依存に対蹠的なのは、個人が結集し自由に協助し合う方式への模索の例である。三部作、とりわけ『春』にも、これらグループの演劇活動、『夜未央(イエウエイヤン) [=前夜]』が描かれている。高家の二女、淑英はこの中の主人公ソフィアにいたく心を惹かれ、相互扶助織 [「利群周報社」] の援助の下高家を脱出し、成都から活動の場を上海へ移す。

この組織は張惠如(ジヤン・ホエイルー)が自家を提供して出版活動をし、同志を募り資金をカンパして活動資金としている。そして、最も根本的な経済力は張家に依存している。つまり、この作品の舞台背景である中国軍閥の統治時代の地主有産階級の有志が活動の根源となっていることを本篇は物語る。この活動はロシアのナロードニキの運動と時代を隔ててはいるも

のの、世界的に通底する。(3)

高家の進歩派は、他に淑華（シュウホワ）、彼女の家庭教師役の琴（チン）、外部に出た覚慧（ジュエホエイ）、内部に滞まる覚民（ジュエミン）を通じて社会主義の思想に大いに共鳴するようになる。

もともと大家族が長く維持した集団依存も煎じつめれば相互依存の先蹤である。だから、社会主義システムが倒壊し、社会福祉活動が荒っぽい合理的経済思想に翻弄される現今、人々は再び急速に家族に再結集する。だが、現代社会はもはや大家族を擁していた頃の機能を持たないわけで、人々は自覚のもと市民レベルの公共政策に未来の多くを委ねなければならない地平に立っている。こうしたときに大家族解体をめぐる長篇、巴金の創造したタイムカプセルから何を学び取るべきか。現代中国文学の回省的解釈はこうした仕事を私たちに指示していると言わねばならない。

高家の大黒柱、覚新（ジュエシン）は、鋭敏な神経で、三弟（サンデイ）覚慧や二弟（アルデイ）覚民らの活動が無政府主義的活動に関わるものであることに気づき、彼らの将来を案ずる。それは三部作に共通して現れる彼らの芸術活動の演劇題目、『夜未央』（イエウエイヤン）の内容に由る。

「覚新の読んでいるのはソフィアについての文章である。彼の注意は雑誌に集中している。彼は興奮して読む。速読である、しかし、どの段の主旨も逃すことはない。それらは彼をときめかせ、心配させる、彼には少しばかり怯えも有る。それは彼一人のためのものではない、案ずるのは三弟覚慧（今読んでいる文章の作者）の前途と安全についてである。彼は以前この事業について少々疑問と危惧を感じていた、覚慧が革命の仕事に加わっているのではないかと訝っていた、今、この文章を読み、その疑問が本当だと判った。」（八章122頁16行～22行）

主人公の案ずる世界、それは高家の「新派（シンパイ）」の過激な傾向であった。

「琴（チン）はテーブルの上に置いてある刊行物をちらっと見てすぐに取り上げ、雑誌の名前と目録を見る。（中略）彼女は題目を読み上げる、『ロシアの女性革命家ソフィア伝』と。彼女は続いて興奮しながら言う、『これは三表弟（サンビャオテイ）が書いたんだわ、きっとあの人が書いたのよ。』と。」（八章113頁19行～23行）

琴はその文章を声に出して読む。ここは、『秋』の一つの山場で、高家の先進女性、若者たちの希望の中心である彼女が何に関心を有しているかを明示するところである。

「彼女は一頁、一頁と翻って、突如手を停めて声を出して読む。

「彼女〔ソフィア〕は私たちのグループで十一年過ごした、相当大きな損失を蒙わり、全面的失敗も経験した、しかし、彼女はくじけなかった。……、彼女がどんなに刻苦勉勵しようと、いかにうわべは平静を保とうとも、本当に彼女は情熱に溢れる天の使いであった。彼女の鎧甲（よろい）の下には女性の優雅な美しい心が躍動していた。私たちは認めるべきだ、女子は男子に比べずっとこうした〈聖なる火〉が与えられているのだ、と。」

ロシア革命運動に宗教のような情熱と誠意が有る理由の大半は、彼女たちに功業を帰すべきである。』(八章114頁9行～16行)

ソフィアについては、『巴金全集』(第二十一巻)に採録されている『ロシアの十女傑』の中の「ソフィア・ペロフスカヤ」(本文301頁～329頁)に大要が記されている。ソフィア・ペロフスカヤはアレクサンダー二世爆殺の首謀者として1981年4月15日に処刑された革命党の女性である。巴金は次のように述べている。

「私は、常に苦痛を抱きつつ正義を愛し罪悪を恨む心を有した頃から、十一、二歳当時の私は一人の異国の女性のためにずいぶん涙を流した。このころ私の知っている世界で最も敬愛できる人は、つまり彼女だけだった。今になって考えると、もとより当時の見方は幼稚なものであった、しかし私は今でも当時の私の勇気を一笑に附したことはない。幼い私は多くの敬愛すべき人物を忘れたが、彼女は確実に世界で最も敬愛すべき人物の中の一人である。

この異国の女性とはソフィア・ペロフスカヤである。外国では、ペロフスカヤと称し、中国のみでは、ソフィア、と呼ぶ。」(前掲書 本文302頁1行～9行)

激流三部作のなかにも、『夜未央』(=『前夜』)は各所に見えるが、ソフィアの何がどうしたのか、という記述は全く見えない。『秋』には覚慧の訳出したというその本を読んで琴や淑華がひどく感動する場面が出てくる。覚新が案ずるのも、それがアレクサンダー二世の暗殺という政権の頂上を狙うテロリズム事件であることに発したものであることは言うまでもない。『秋』に見えるステイエブニャーク(1852-1895)によるソフィアに関する風貌を描いた文章を紹介し、巴金の激流三部作の行動派、「新派」を魅了したことの理由を示すこととする。

「彼女はあらゆる状況の下でも私たちの陣営の中で十一年を過ごし、相当な決定的損失、全面的失敗を経たが、ずっとくじけずに新しい仕事を準備した。彼女はどのようにして心の中の神聖なる火の粉を完全に保持するかを知っていた。彼女は憂えず、悲しまずの厳しい〈義務観念〉を以て自身を束縛しようとしな。彼女は刻苦と自勵、表面から見ての冷静さにもかかわらず、実は浩然の気に満ち溢れ人を鼓舞する天使であった。武装した甲冑の下には女性らしい優美な心が躍っていた。私たちは認めねばならない、女性は、男性よりもこのような〈神火〉を賦有しているのだと。ロシアの革命運動が宗教のような熱狂を有しているのは、大半は彼女たちに功業を帰すべきである。彼女たちが革命運動に加入しさえすれば、革命運動は覆されることはむずかしい。」(前掲書 本文326頁10行～19行)

『秋』の中にソフィアをめぐるエピソードを欠いてしまえば、巴金文学は全く『紅樓夢』もどき現代版に墮しかねない。帝政ロシア倒壊を狙った1882年の大事件は、軍閥政治の中核に向ける直接攻撃へと大家族の人々を導く。ただし、『秋』公表のとき、軍閥政治は滅んでいた。そこには共和政治を目指す民国政府が存した。だが一方では廢帝を擁する満州帝国が、大日本帝國掌握経営下にあった。巴金の『秋』は旧システムの後、中国青年を抗日に向ける用意があったのか。

IV 危急、覚醒

【秋】では弱い立場に在る人、危急に置かれた人が注目される。若い人の場合はとりわけ痛々しい。倩児（チェンアル）、淑貞（シュウジェン）、枚少爺（メイシアオイユ）の三人の死である。使用人の死ということで埋葬も氣遣われる。倩児は自分を見舞ってくれる使用人側の人々に、陋屋の中でも徹底して気配り、礼節を尽くす。淑貞は井戸で投身自殺する。新しいジェネレーションでありながら、すでに纏足をしている彼女は、激しい夫婦喧嘩をする身内夫婦の鬱憤のやり場として、絶え間ない暴力を身に受け、つらさに絶え切れず死を選ぶ、彼女の暗喩として用いられるのは、秋の虫、透き通るコオロギの声だ。静寂の中に際立って響くその音色は、小さく、しかも忘れられぬほどに人の心にしみ入る。枚少爺は、「閑書」 [=ポルノ小説] を手放せぬ臆病な若者である、周囲の懸念を外に見る間に、当世の大儒とうたわれる馮樂山（フォン・ローシャン）の娘と結ばれるが、年上の妻に圧倒され、やがて閨房の娯しみの果てに肺を患い、吐血の中に最期を迎える。周囲の扱いは皆冷淡だ。

新しい世を迎える時は、ヴァイオレンスも存し、その中で弱者が強者に凌がれて廃残してゆく。では、強者とは誰か。直接は彼らに素早い対応、助力を控え、医療を億劫にする叔父たちの剣と認められる。一方、とどのつまり幸福を手にするのは翠環であり、琴、覚民でもある。優勝劣敗の社会進化の相を巴金は冷徹に示し、幸不幸を強く対比的に描き、世の変転の不条理を暴く。巴金の翠環、琴、覚民に対する思い入れは相当であり、この点は巧緻のせいで蔵されているが、かえってそこにニヒリスト的巴金の平等に明暗を見分けようとする用意が感ぜられる。そして、驚異の悲喜劇を精一杯演じた後、大量の咯血死を迎える枚少爺を写し、【秋】は大転換の契機一火事を出態させ、高家の人々を混乱に投げ入れる。アナーキスト巴金の手法である。

危急の際、周囲はどう動いてくれるのか。【秋】の山場は幾つか数えられる。それは火急の場合への人々の対処の仕方を典型的に示している。旧いシステムにもはや拘泥できない結果を突きつける。

【秋】終了間際に主人公、覚新が経営する事務所の在る「商業場（シャンイエチャン） [=マーケット街]」の火事が、高家を襲う経済上の大打撃として描かれる。

弟の覚民は、日頃の活動の拠り所である「利群周報社」の被害を気にする。しかし張恵如は、建物は焼失しても出版に必要なものは搬出し、校正ゲラなども無事であり同志は皆元気である、と覚民に知らせる。張恵如は家屋を事務所に提供しているが、一向に出火がダメージになっていない。そして為すすべなく残骸を前に立ちつくす兄、覚新に後事を託して、覚民は、仲間を魅かれて一団のもとへ急ぐ。旧套を捨てる彼の姿勢は極めてあっけらかんとしている。

頼みとする弟を先に往かせた覚新は、全くの孤立無援の中、雑役夫から実業生活の中心の崩壊を聞く。

「覚新は惜しむように覚民の後ろ姿を眺める。はじめは彼の頭がやや低い頭の中で動くのが見えた、そのうち前がごった返し、三、四人がわめきながら人込みをくぐり抜けて来て、覚新の腕も彼らに押された、体勢を立て直した時には覚民は影も形も見えなくなっていた。

覚新はしばらく立っていた、蒸し暑さがたまらなく戻ろうとする。振り返ると、そこは、全く人、人、人でびっしりと詰まっていた、見えるのは動いている数え切れない頭であり、ワアワアと人の声がざわめく、彼らは一体何をしているのか。彼の気力はまたしても萎えた。(中略)彼は急に一軒の閉まった店の檐下に出た、そこでなんと事務所の雑役夫に会った。大声でその者の名を呼び、慌てて駆け寄った。雑役夫も覚新を見つけると、彼が言う前にアタフタと訴えて言う。

【高の旦那、駄目です、すぐに丸焼けになります。私はただトランクと布団一式だけ持ち出しただけです。ごらんになりましたか、まるで大きなかまど、かまどの蓋を閉めて火が燃えているようですね。私は生まれてこの方、こんな大きな火事ははじめてです、風を突き抜けて、火は人よりもずっと早く走るんです、私ももう少しで逃げられぬところでした。】(四十六章630頁13行～631頁6行)

地獄に頼む「仏」は、従来のシステムの基底を支える人である。井戸に投身自殺した淑貞の屍に最初に触れたのもそうした人々であり、上部構成者は兄弟といえども窮地にこちらを残して別途へと馳せ参じる。覚新の耳には報告者の真相がいたく印象づけられる。巴金のリアリズムは人の心情を隅々まで極め揺るぎない。

ここでテーマに関かわることを若干述べる。【秋】南国版-1940年5月の作者の序が付してある一の表紙のイラストは二色を際立てて配色している。上部は真黄色、下部は深緑色である。ここを如実に示す篇中の文章は何処に求められるか。

火事で実業の拠り所を失った主人公覚新は失意のどん底に在る。

「ひとひらの黄色い枯れ葉が、風に吹かれて覚新の肩にくっついてくる。覚新は手を伸ばしてそれを掴もうとしたが、水の中に落としてしまう。木の葉は水の上に浮いて、流れのままに動き、水面の無数の枯れ葉の中に混じって見分けがつかなくなった。彼は覚民の質問(=「なぜ犠牲精神を、正しいこととするのか」ということば)に答えようとしなくて、独り言のようにつぶやく、「また秋になった。私は秋が本当に怖い。ひとひらひとひらと樹木の葉が落ちてゆくを見るのが怖い。私の生命(いのち)もまるで秋のようだ、今、落ちる時になっている。」(四十九章 657頁3行～8行)

覚新は疲れているが、老人とは異なる、青年の覇気を責任の負荷で殺がれている。そこを弟の覚民は激励するように尋ねる。

【「大哥(ダアーゴ) [=一番上の兄さんの意], あなた、どうして落ちるなんていうんですか。二十幾つかになったばかりなのに、ちょうど若い希望の時ですよ。」覚民はそんなことないというふう言う、彼の声は若く、力が有る。

『君は私の心がすでに老いたのがわからない。』覚新は意地になって言う、彼の心境は頭上の灰色の空のようなのだ、彼の生命（いのち）は、傍らの大半の葉を落とした樹木のようにだ、と。彼は、左腕の上に落ちた枯れ葉を見て、一言つけ加える、『ここ三、四年この方、私がはっきり覚えているのは秋だけだよ。』（四十九章 657頁12行～20行）

覚民のガールフレンド、琴が抗弁する。

『大表哥（ダァビャオゴ） [=いとこの一番上の兄さんの意]、あなたは どうして 気づかないのですか。秋が過ぎれば春はすぐ来るんです、ずっと続く秋なんてありませんもの。』琴は励ますようにほほえんで慰める。覚新は少し考えて、手の上の一枚の葉を水の中に置き、低い声でため息をつく。

『しかし、散り下った樹木の葉はもう緑には変わらないよ。』

琴は笑いながら答える。

『大表哥、お分かりにならないの。来年になったら樹の上には同じように緑の葉がいっぱい蓋うんじゃありません。』

覚新はしばらく沈んでいたが、やっと一言。

『しかし同じ緑の葉とちがうんだ。』

『まさか、樹木はそれら新しい葉のために生きてゆこうとしないんですか。』

琴の顔は明るい笑顔で覆れている。『私は一本の樹木が落ちてゆく木の葉のために死んでゆき、翌年花を開こうとしない、そんな樹木見たことないですわ。』覚新の表情はほころんだ。照れながら言う。『琴妹（チンメイ） [=従妹を指して言う]、君にはかなわないなあ。』（四十九章657頁21行～658頁8行）

覚新はこれまで婦人や身内肉親を次々と亡くして、火事で財力に打撃を受け、悲嘆に沈み脱力している。しかし、思いがけなく年下の若い好學の女子に励まされ暫し気力を取り戻す。彼にはある決意が固められ、覚民の無遠慮な問いに対しその一端が示される。

『[大哥、僕が見る所、あなたはもう毒に中たっているよ。旧式の家のお空気があなたをこんなふうにくすぶらせてしまったんだ。』覚民は気の毒がって言う。

『(いいや) もしかすると私も解毒剤を見つけられるかもしれない。』意外にも、覚新はため息をつき、体の向きをかえ石畳みの方へ歩いてゆく。』（四十九章659頁1行～4行）

覚新は落葉に亡き婦人身内、広大な邸の中で見聞する人々の悲劇の生を見たし、自己をそれらの人々と同じか細くはかない死にゆく身とアイデンティファイした。しかし、周囲は、彼を大家族の運命を託す巨木として仰ぐことを緩めはしない。新しい生命、横溢する青春はこの中にまた萌え出て、彼もその中で生を謳歌していつてもらわねばならない。散ってゆく葉も、かつて巨木から出、巨木の生命活動を維持した。新しい芽の緑の葉はいわば、黄色い葉の落ちる瞬間、その出現を下部において保障される。覚新の芽には水に浮かぶ沢山の黄色がしみる。しかし、樹木の枝々に育っている緑、やがて深緑になる、苦痛は過去のものだったが、彼は責務と共に蘇生せねばならない自己に目覚めた。

人は隠忍の限界を見極め、行動を明確にする。

巴金の作品に見える登場人物、就中、主人公においては、静から動、静動の対比が目立つ。「秋」においては、静の極みの覚新が、動の典型的の弟と協力して高家の中で主導権を握り、解体の幕引をする。淑貞の屍体を二人で高く掲げて衆目の中を行く行為には、もはや後戻りをせず、退路を断った兄弟の決意が表れている。劇の脚本のような生彩とある種の無骨さの示されているところだ。場面を一層ひき立たせるように雷が轟く。

「ここにおいて怖るべき雷が轟いた。袁成（ユアン・チョン）、文徳（ウエン・ドオー） [=両名とも使用人]、覚新、覚民はみな井戸の入口に倒れ込んだ、腰を曲げてそこに蹲まる。彼らは一つの物を移動させている、口では絶えず短いことばを発しつつ。彼らはゆっくりと立上がり、そろそろと井戸の入口を離れる。覚新、覚民の二人は淑貞を担いで井戸の傍の階段を下りる。文徳と袁成が後ろに従っている。高忠（ガオ・ジョン）、蘇福（スウ・フウ） [=両名ともやはり使用人] もやってきた。風雨灯（フォンウイドン） [=外で使う照明道具、提灯] の光がむやみに小さい眼、小さい口の美しい顔に止まる、相変わらずの我慢強い哀寂の怨みを残した顔、前髪は額に貼りつき、眼は閉じて、左眼の皮の上と左の額のかどには幾本かの血の糸が残っている、水滴の中に絶えず、髪や鬢の間から滴り落ちる。口はわずかに閉じている、口の隅には血の跡が残る。衣服は水に浸かって透けて見え、彼女の痩せた小さい体を包んでいる。小さい足の上の刺繍の花模様の絹織物の布靴は片方のみ身につけている。バラバラになったおさげ髪は重なって垂れさがりずっと水を滴らせている。（四十二章578頁7行～17行）

巴金は、淑貞の骸を克明に描く。徹底して接写することで彼女に注がれる衆目の有様が想像できるようになる。凄惨な場面が印象づけられる。生存競争の容赦のない圧力は、弱く、静かで、抵抗のない人に押し寄せてその人をこの世から抹殺する。当権者の冷淡さは自明のこと。だが、無辜の死を償う形が自己の壊滅の他にないことに気づく。

「克明（コーミン）は水煙袋（シュエイイエンダイ） [=アヘンを吸引する用具] を抱えて、張氏（ジャンシー） [=高家の側室] と一緒にやってきた。（中略）克明は顔を曇らせ何も言おうとしない。平静ではない、大きなショックをうけた様子。彼は大事の避けられない前兆を見た。だが、決して特に淑貞に関心を持つとしない。彼が悲しんでいるのは、次第に暗くなってゆく自分のこれからである。彼らが一步一步壊滅の道に近づくのが解ってくる。」（四十二章579頁5行～10行）

兄弟で担ぐ淑貞の骸は次第に重くなる、それは無言の圧力となって、覚民を行動に駆り立てているようだ。空に輝く北極星も彼らに何一つ教えない、ただ、覚民は決意を固める。

「彼らは黙々と歩き続ける。淑貞の身体は手の中ですっと重く沈んでくる。これは愛にかかわる仕事だが、それでも苦痛の仕事である。この柔らかい細い身体は突然鉄の固まりのようなものになった。それはズッシリと重く彼らの手を押しつけ、鉄の石のように彼女の心を圧迫している。頭上には高く広い真っ暗な空が在り、うしろにはユラユラ揺れる大

勢の人の群れ。彼らはこの心にのしかかる重圧をどこへ推してゆこう。不平と恨み、憤りの声が覚民の心の中で叫んでいる。『どうして僕らは生きて、皆も活着ているのに君だけが死ななくてはいけないのか。君は一人も傷つけていない。』しかし今は一切が無駄となった。彼女の血のついた小さな口は一言も、一つの苦痛を訴える声すら吐こうとしない。彼は空を見る、空は依然として広く暗い、空いっぱいの星は少しもその輝きを変えていない。北斗七星はこれまで通り北方を指し示し、北極星はなお明るい(3)それらは何千何万の人の世の姿を見た、それらは今、彼に一つの答えも発しない。それは暗い絶望の時だ。しかし、覚民の恐ろしい表情に誰一人気づかなかった。(四十二章580頁10行～581頁1行)

静から動へ、それは弱き者の死を直視して湧き上がってきた怒り、行動への転機を自ら知らしめられた。巴金の主人公はこうした形で苛烈な抗争へ挑んでゆく。『火』のなかで静かで、ガリ版にカッティングをし、要人急襲の場で友人を守り助かるべき命を献げる子成（ゾーチョン）も一例である。このような静-動という行動のパターンは中国の人々に共通する。

V 抗争と解体

覚民は、淑貞が井戸に投身してからのち、叔父たちに対して有していた気遣い、遠慮の念がなくなってしまう、ストレートな疑問が続出する。礼教の一応の護持者としての対面が崩れたからである。たとい故人であれ、現存する当権者であっても、不敬は許されぬはずである、という論理が、抗争を事とし、弱小者をほおって振り返らぬスペンサー流の適者生存を金科玉条とする郷原的儒家を追い詰めてゆく。覚民の思想は反社会進化論の立場に依拠する相互扶助思想であることは言うまでもない。こうして、叔父相手の大家族内口論の幕は切って落とされる。

『僕は家長とは一体どれほどのものか全くわからないし、誰が四爸（スーパーバ）（克安のこと、覚民にとって年齢で四番目の叔父）を家長である、とのたまわったのかな。』と冷やかな覚民。

『ふん。』克安は顔をこわばらせている。

『お前はわしらが邸を売るべきじゃない、と悪口を言っているそうだが、』続いて克定が言う。

『邸はお祖父さんが造った、お祖父さんは売るのに反対だろう、しかし、僕とは関わりがないよ。』

『いい加減なことを言うな。お前、張碧秀のことも言ったな』は顔を真っ赤にし大声で言う。

『張碧秀は有名な役者だよ、誰でも彼のことを言わない者はないよ。』傲然とした覚民。このとき覚新がたしなめる。

『二弟（アルデイ）、後生だからこの辺で停めてくれないか。』

彼はひどくやりきれない様子。覚民は覚新にかまわない。克安はこの機会を把えてまく

したてようとする。

『まだ張碧秀のことを言うのか。お前の母さんにひどいことをしてやるぞ。』

克安の薄暗い黄色の顔が突如黒くなった、口汚く罵り、思わず片手を伸ばして覚民の頬を叩く。

居合わせた人は覚民を案じた、ある者は克安の八つ当たりを恐れ、ある者はひそかに喜んだ。覚新は恐れ、『おしまいだ。』と思う。

覚民の顔にも急に恐ろしい黒雲が生じたようだ。だが、彼の眼は星のように輝く。彼は落ち着きはらい、手を伸ばし、克安の油気のない瘦せた手をきつく握りしめる。彼は傲然と、憤って言う。

『四爺、あんた、よく言ってくれた。僕の母さんは部屋の中にちゃんと居るよ。母さんに何をすつもりだ [=どんなひどいことをするんだ、の意] ね。』

克安の虚弱な体には少しの気力もなかった。アヘン中毒で興奮はしても、みるみる沈んだ。覚民の厳しい叱責を受け、怒ったり焦ったり、もごもごして答えられない。

覚民はやや蔑むように克安の手を放し、皮肉をこめて言う。

『さあ、もう前とは違うよ。四爺もこれから人に手を出さないですむ。まず、物事をはっきりさせ、それから始めることだ、そうすればひどい目に合わずに済むからね。』

『お前、わしに説教してくれるわい。わしは叔父としていとこを打てないのか、ええ。』克安はまたしても罵る、顔はいよいよ黒ずみ声はますます大きくなる。だが、怒鳴るだけでもう手出しはしない。

『僕は聞いたことがないね、叔父たる者が、お前の母さんにひどいことをするぞ、などといとこを罵ることができるなんて。』覚民は顔をこわばらせて反駁する。

『まだわしとやり合うつもりか。この無礼者の生れ損ないめ。』克安はたまらず地面を踏んでくやしがり嘲る。

『四爺、もう気を静めてください。二弟は若くて物事がよく分かってないのです、一緒に競ってもはじまりません。さあ、部屋に戻ってください。あとでこれにはよく言い聞かせますから。』覚新は丁重に克安をひきとめ、恭しく謝る。彼は事が大きくなるのを心配するばかり。この時でさえ、安穩無事に済ますやり方をこの上なし、と信じている。(四十九章664頁1行～665頁13行)

一度戦端が開かれると、そう簡単に収拾できない。抗争は根深い理由を有しているからだ。事業の資金繰りに行き詰まると、早急に入金の可能性の有る対象に目がゆく。一人二人でなく、叔父たちから発したと思われる売却の話が女性の口から表明されていた。

邸売却は一個の理由からでは、むろんない。大庭園は人々の憩いの園であるけれども、売却の決意の固い人々からすれば、まさしく無用の長物に映じる。リアルな現状を直視するのも、かえって女性たちの眼に依ると説得力がある。巴金が王氏(ワンシー)を長冗舌者に仕組む。

「ねえ、何日か前、劉升(リュウ・シヨン) [=小間使い] が田舎から帰って来て何を

言っていたの、去年の小作が収めてくる米は並だけど、おそらくその前の年の半分ちょっとなのよ。今年はずっと減っているの。この何か月はどこも戦さをしていて匪族も抑えられていないし、凶暴になってきてね。どの県にも出ているって言うわ。(中略) 今年の新しい納入米の八割相当はそいつらが手にしたって。小作人は二割しか手にできなくて、主人の方では完納を迫るしで一銭も入らなかった、だって。それが万一本当だったら気を揉む話よね。あんたの四番目の兄さんもいくらも蓄えが無いんだし、私たちもたまらないよ。あんたらのように金は持ってないし。田畑を売っても今のところ価が好く売れないし。家を売らなきゃ私たちこれからどうやって食べてゆくよ。それにね、邸はこんなに大きいんだよ、私たちは一軒の家で何人も入っているのに、こんな大きな場所住みきれないわ。役にも立たないのに大きな花園も有ってさ、一年を通じて数回も来られないのよ。まして花園にはいつも悪いことが起きるし、一昨年は鳴鳳(ミンフォン) [=身分の低い手伝いの娘] が湖に身投げするし、今年は四番目の娘が井戸に飛び込んだのよ。花園の中にはきっと怨みで死んだ者の亡霊がいるはずよ。もし長く住み続ければ、必ずずっと好くないことがことが起こるわ。五弟妹(ウーディメイ) [=沈氏(シェンシー)], 持ちこたえられるの。あなたが持ちこたえられなくなれば、つまりは三番目の兄さん[克明] だってあやしちやいられないんだから。」

王氏はこうなってくると、まるで沈氏を威嚇しようとしているようだ。」(四十三章 590頁16行～591頁8行)

高家を売ろうとする理由は煎じ詰めれば、軍閥政治時代の無法地帯の拡大で、秩序が悪化し、生産が妨げられ、一戸あたりの収入が激減し、大地主である高家への納入も少なくなり、当然その当事者連の懐も寒えて依拠している婦人たちも心細くなっているわけである。巴金はこの作品の随所にこうした「証言」を配し、高家倒壊の必然性に言及する。社会、経済の変調が高家の意気消沈につながることを示す。

憂愁の人、主人公も遂に決意を実行する。

激流三部作を通じての正真正銘の主人公、高覺新(ガオ・ジュエシイン)は、終始神経質な懦弱の人間として印象づけられている。しかし、『家』、『春』はともかく、『秋』になると彼の確信的行動が目立つようになる。もし、このような新たな性格が加えられなければ、大作の終了は難しかったろうと考えられる。そうした特徴的場面は、潜在意識を顕在化するよう仕向ける、占い、「卜南失(ブナンシー)」を用いて肉親、蕙(ホウエイ)の妹、芸(ウイン)を催眠状態に置き、仮の場所に長く放置してある屍体を本式に埋葬して欲しいと、「降霊」の形で彼女の口から言わしめる、それは、心身の動揺を来している人物の仕掛ける施術ではない、そうした場面で証明されるのである。彼の基本的立場は、大家族解体ののちに覺新と生活を伴にするようになる、「婢女 [= 召し使い]」の翠環によって弁明されている。

『実は大小爺(ダァシアオイェ)に頼らなければ、二小爺(アルシアオイェ)、一緒に上海に居る三小爺(サンシアオイェ)、二小姐(アルシャオジイェ)もどうして、今日

がおありですの。私もあなた様に変感謝しております。』(六章91頁21行～24行)

翠環という働き者の自分に対する「評価」はいたく彼を喜ばせ、心底に彼女がくつきりと印象づけられる。

「翠環は空を仰ぎ見る。彼女の顔全体は月の光を浴びている。少し高い額の上は劉海(リュハアイ) [=前髪] に蓋われている、髪、鬢は両の頬に垂れている。両つの眼は懼れるように天空を眺めている、皓々たる月の輝きの下で燦爛と光を発している。若いすっきりとした瓜形の顔全体にはつつましい純粹さが現れていた。」(六章92頁2行～5行)

【秋】には当初から覚新の基本的優柔不断が示されている、のは無論である。それは、彼の立脚点に対する強すぎる責任として彼の行動を制肘している。心を許すところのある翠環にそれが吐露される。(だから新しい出発は彼女とともになされる)

「覚新はこれ以上口をつぐんでいことができなくなった。少しづつ聴かれるのを恐れている言葉を発した。「二小姐(アルシャオジエ)は帰って来る様子はない。どこに飛び立った鳥が籠に戻った例が有ろうか。」このあともっと言いたいことが有ったようだが、彼はそれは言おうとしなかった。彼は独り言をいう、「私は籠の中に留められてずっと籠の中にいることになっている。」

「え、え。」と翠環は辛そうに一声叫んだ。彼女はそれ以上のことを言い出すきっかけを失ってしまった。」(六章93頁13行～19行)

「籠」は大家族の運命であり、その運営、舵を委ねられている彼に係る責任全体である。いとこの琴(チン)や妹の淑華(シュウホウ)が、前途有為な二十六歳の青年に対する激励を込めた質問に答える彼の語は苦渋に満ちている。

「私は何代も続いた子孫として、長房 [=第一の家屋] の長孫として存している、高の家では物事を取り捌けることを私に求めてくる。彼らはどこに私を進んで置こうとするのか。」覚新は鬱屈した気持ちを抱くように答える。「何が起っても彼らはずっと私を探し、君らを探ねようとはしないはずだ。君らはあの人たちのせいにするが、それは私が好くない、ということになる。君たちは礼教を悪く言うが、それも私が間違っているから、ということとなる。すべて私一人に責めが有る。」(七章100頁12行～16行)

この無限と言える責任は、国家、社会の責務として寓喩され覚新に委ねられている。人々の共存の地は何処に築かれるのか。

結語に代えて

【秋】全五十章、後書きを含めて巴金の言おうとしたことは何か。大家族の解体の経過を見つめ、それをその中心人物の眼を通して必然と理解させ、後事を自分より若い青年子女に託すことをなさしめる。旧中国とは、こうした大家族の集合であれば、その軛(くびき)を離れて外へ自由を求めた若者は、もはや大集合体に振りかかる困難を常に意識して憂鬱な顔をしてい

る「エリート」に反撥を感じなくてよいのか。否、である。重責は個々人に分かれたれ、各個の中、諸家族に分居した人々は、個人として、生活を成り立たせ、再生中国に押しよせる巨大な荒波に向かわねばならない。

巴金は、後年になり『秋』のモデルの一つになった、成都の旧居について『随想録』において述べ、封建主義を認めるわけにはいかない、と結ぶ。むしろ、巴金のいう封建主義とは、ことばそのものなかに簡単に隠されて葬り去られるものとは異なる。あらゆるシステムは、形を変え姿を変えて個人の前に現れる。大家族を離れた人々が向かうべき運命を、彼はそののち、名作『寒夜』で示すことをする。そして主人公の汪文宣（ワン・ウェンシュア）の小家族を打ち砕いてみせる。そこで残された母と彼の子が頼る箇所はついに四川の母の故郷のつながりであることを、彼の隣人の口から別れた妻は聞かされることになる。新しい社会のシステムは簡単に崩壊し、保障を持たないのか、巴金は相互扶助の思想の持ち主、クロボトキンの影響を強く受けた、自らの起点を回想し、省察を加え、具体的に相互扶助の在り方を後代に考えてもらうために、巨大タイムカプセル『秋』を残した。私はそう強く考えている。

巴金の作品を通じてもう一つ忘れてはならないことが有る。それは、力弱き人々を各所に配し、その働きに言及している。『秋』にそれが一層顕著である。そうした心情は、李大釗（1889-1927）、陳独秀（1880-1942）の中国の初期マルクス主義者も保持していた。中国の儒家の相貌に連なるものであることを、作中人物、鄭国光（ジョン・グォグァン）の「権威主義」を目立たせ、本作品には珍しく、主人公の側からしてほとんど一方的に非難される対象として、旧式儒家を圧倒する傾向に逢着するとき、不思議と想起される。中国の文学とは、各個別掘り下げのみで比較することを忘れては、研究の進捗することが難しいのではないかと、といたく懸念される。

『秋』に出てきた暗喩「大鷹」も、ゴーリキイ（1868-1936）の作品に見えた傷ついた鷹であることを想起するとき、ロシア文学と現代中国文学との不可分のことが予測される。広い両地域の比較を私達に課す中国現代文学とは畏るべき対象である。

(注)

1. 「私は当時、自分たちの邸を背景としたが、決してそこを宣伝しようとしたのではない、私としては細密な計画を有してなかつただけのことであるから、記憶の中に雛型を留めてないとしても、作品を書いたあとは前のことは忘れるし、前後に矛盾を来たして、読む人は何が何だかわからないかもしれない。（『病中集』〈随想録〉第四集「私の昔の家 [= 『我的老家』」（1997年人民文学出版社）
2. 「生の拡充の中に生の至上の美を見る僕は、この反逆とこの破壊とのなかにのみ、今日生の至上の美を見る。征服の事実がその頂上に達した今日においては、諧調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。諧調は偽りである、真はただ乱調にある。（『生の拡充』『大杉

榮評論集』本文66頁 1996年 飛鳥井雅道編 岩波書店)

3. 『火』の中の登場人物が発行している雑誌が『北辰』であるように、巴金には「北極星」への関心が注目される。ゲルツェン (1812-1870)、ナロードニキ主義の開祖が発行していた『北極星』を、巴金が念頭に置いていたことが想像される。

4. 「1920年 (民国 9年) 17歳

この年後半から、クロボトキンの『少年に告ぐ』の中国語訳本を読み、ひどく感激する。『新青年』社の編集主任 陳独秀に指導を乞う手紙を出す。返信はなし。』(『巴金年譜簡編』[1904-1983] (『巴金作品評論集』陳思和 他編1985年 中国文連出版公司))

5. 「巴金は以前はひどく共産党を批判した。しかし、共産党が迫害を受けてから [=1927年の蒋介石の反共のクーデター] ののちは、反共の文章を書こうとしなかったし、公然と文章の中で反動的國家主義社の首領が共産党の著名なリーダー、革命の先駆者、李大釗を侮蔑するのに反対した。(中略) 巴金は最高の称賛を用い李大釗を“殉道者”と呼んだ。」(艾曉明著『青年巴金及其文學視界』(1989年 四川文芸出版社) の中、本文71頁7行~10行)